

いのである。

事實私は、西川氏の知遇に感ずることの極めて深い一人であると思つて居る。私は、私の現在の職業に携つた當時、否寧ろ斯道に入らない以前から、私共の仲間の或人々が今でも思つて居る如く、鈴木商店の營業上の態度が、極端なまでに利己的であり、又排他的であつて、飽くまで中産階級以下の人々の怨敵でもある如く信じて、絶對に好感を持ち得なかつたのである。或時私の一友人から「近代的商人の典型として、且又新しい時代の君子人として、畏敬すべき士を紹介する」と云つた大業な前提の下に、初めて紹介されたのが西川氏であつた。

相當に拗くれた私の頭には、西川氏と接見した第一印象は、正直な所そんなにならざる期待に副ふものではなかつた。其れは、今の世の中に何が君子だ、人格者が何だとの一種の僻んだ見解が、私の頭に先入主となつて居たからでもあらう。

けれども三度五度、私の職業上の使命から西川氏と相會する機會が多くなるに連れて、高潔な而も恬淡な氏の人格に、私は全く魅せられてしまつたのである。其れは或は、私のみが爾く感じたのであるかも知れぬが、西川氏の私に對せられる態度

は、其所に微塵の隔壁を設けられなかつたのみならず、私自らが忸怩たるまでに、謹嚴で且至純なものであつたからである、レポーターとしての私は、其使命を果たす上に如何に西川氏に負ふ所が多かつたであらう、其れと共に、エヂターとしての推論の上にも如何に適確の資料を供せられたであらう。

例の米騒動が勃發して、事の真相と事理を解しない無知にして殘虐な者等は、一圖に他の煽動を信じて、物價の昂騰は偏に鈴木商店の買占の結果だと誤解し、險惡の氣が扇港の空に漲つた、忘れもせぬ大正七年の夏八月十二日の事であつた、其日私は兵庫縣廳の高等課で、今晚は如何にしても鈴木が危い」との噂を耳にして、早速西川氏を訪うて其事を物語つた、あゝ其時、西川氏の温厚な謙讓に充ちた面上は、常にもなく颯と悲憤の色を漂はした、君つ、世間の人々は何故そんなにまで僕の店を呪はねばならぬのだ、鈴木商店は常に社會的に働いて居るが、何時世の中の人達から恨まれる様な悪い事をしたかつ、餘りだつ」と、聲を顫はせながら恰も私が當の對手で、もある如く、激越な調子で詰寄られた、西川氏の正直な率直な點が遺憾なく感得せられるではないか、而も其夜、兇暴な賊徒の手に依つて放たれた毒箭は、さし

もに宏壯を極めた彼の鈴木商店の建物を甜盡して灰燼に歸せしめたのである。蒲柳の質とは云へ、責任感から來る意氣に依つて、精勵恪勤一日も忽にせられなかつた同氏も、自らの誠意を蹂躪せられた不合理な世間と、燒討に依つて被つた痛苦と悲憤の爲に、終に其健康と意氣とを奪はれたのである。氏の宿痾たる胃腸病は執拗く襲ひ蒐つた、極度の攝生と節制、軒昂たる精神は、克く一年有餘を病魔に抗し來つたのであるが、天壽の盡くる所、此稀世の人格者も亦其雄圖を遣るに由なきに至つたのは、人吾共に惜みても餘りある事どもである。

當時私は、分掌する事務の都合から、稍久しく氏に接する機會を得なかつたが、病の爲に引籠られつゝあることを傳へ聞いて、前後唯二度見舞狀を差上げた、其れに對して二度とも代書を謝すると附加へられて、日増しに輕快に向つて居るから安心せよ、この意味の返しを寄せられたが、其輕快とは今にして思へば、全く盡きなんとする餘燼の唯瞬間の明るさであつたことを限りなく悲しまれる、私は今も時折私の敬仰するN氏と共に西川氏の追憶談を繰返しながら、常に思慕の情を新にしつゝあるのである。

葉卷の薰りなつかしめ茶山花の椽に

(三) 謹直の化身 永瀬彰三

古を思ひ今を行ふ

謹直の化身が一個の西川文藏なるものであつて、其れが氏の全汎であつたと云つても間違はあるまい、此事は大略氏を知る程の者は肯定する所で、若し之を否定する様な人があつたら、自分は強要しても肯定させて置く必要があると思ふ程、生前氏の身邊に在つて極めて自然的に斯く感じさせられた、次で此謹直の外に、氏の彼の圖抜けて大きい大脳に比例して、頭腦の働きの偉大であつたことを併せて感じさせられた。

更に特記すべきは彼の謹直さで、よく世間に見る一種狷介跼蹐な處と、銜氣と云つた點が微塵も無かつたことは、世に云ふ謹直と云ひ磊落と云つたことも、所謂法に二法無して、徹すれば自づと道は一つと感心させられ、面の當り氏に據つて其れ

を見せて貰つた。

自分の様に、常に閑泥棒的に無駄話の爲の氏の訪問に際しても、氏は何時でも例の眞面目な引締つた面持で、時に机に向つて筆でも執つて居られるときには、挨拶も抜きにしてテキハキ仕事を終られてから、改めて「失禮しました」と、一定而も心から挨拶されるのが常時で、遂に渝ることなく、苟も仕事中に物を言はれた様なことは、随分永き月日の間にも一度も嘗て覺えぬ、而も其れが如何にも自然的に感じられるだけ、人により見る厭に儀式張つた様な感じは些も生じなかつた、而して話中には、卒然として笑ひ卒然として應答され、聊か銜氣と云ふものが無い、要するに謹直の徹底の結果とても云ふのであらう。

兎もすると此種の人の陥り安い跼躑狷介、或は小量と云つた點は、氏には到底見られなかつた、いつか何かの席上で、時の知縣清野長太郎君を偶々招かれ、自分も其席に在つた、時に金子直吉氏が知縣に氏を紹介すると、「私が西川文藏です」と、例の眞面目な調子で、斯う挨拶した切り、他を語られなかつた處は、云はゞ一介の商人としての氏の立場からして、此際多くは之を機會に、お上手の一つも相手が相手だけに

口にする處を「おまへが兵庫の役人さんかえな、私はモールが大嫌ひ」と云つた、男らしい態度があつたのを見ても、謹直にして而も大量の景慕される。

人も知る、氏は非常に骨董趣味の深かつた人であつたが、無論世の所謂骨董いぢり以下と全く趣を異にして、鑑定家としても立派に一見識を備へ、眞乎理解しての好き者で、特に書家ならぬ志士、烈士又は人格者の書を非常に憧憬され愛玩されて居た、いつかの話の節に「家族引連れ別府温泉入りを行りましたが、成金風の爲ですか、部屋を取るさへ怪しい様な始末でした、矢張自分の家で内湯にでも這入つて、家内中座敷で何かして遊ぶ方が何よりです」と、亦宅で追慕する故人の書幅でも床に懸け、抹香でも拵じて静座する一夕が、自分には何よりも楽しみでもあり好きです」と、泌々語られたことがあつたが、私の時間の餘裕の尠かつたと聞く故人に對し、自分は此言葉を今でも時々思出して、此故人の樂みを充分させてあげたかつた様な氣がして、何の理由か涙ぐまるゝことさへあるのを茲に自白する。

まして斯うした話の場合、自分は徒に天下國家を氏から聞かなかつたことを非常に喜んだ、事實天下國家は氏の行であつて、如上氏の庵中一抹の香煙裡に氣を養

はれることは、其趣味と共に實は其れが偉大なる店務の原動力養成に在り、將又天下國家を行ふの蘊蓄法であつたのは事實である、此事は自分が、三井物産と今一つ大會社の上位の知己の此頃の言葉に、彼の店もあれだけ廣汎に商賣して居るが、我々仲間商賣として事務の澁滯尠く、取引上苦情が案外尠く、上品な極めて常識的な取引工合には感じさせられたが、此れは陰に陽に西川君の在ることが云々と、口を一つにして而も同時に聞いたところである。

趣味即事務とても云はうか、偉大なる謹直の偉大なる力を氏から見ることが出来る、氏の謹直の唯二文字の中には、斯うした餘裕を併せ含んで居たもので、氏の全汎を云へば「古を思ひ今を行ふ」之を一國家として、昔時の文化を體し今日の物質文明を遣る底の、精物併進の理想的美點を多く持たれて居た人だと信ずる。

終に、非常に又情の人であつて、何か人と悲痛事を語られるときには、自他に關せず更に眞面目に耳を傾けられ、共に泣くと云つた人情の美は、故人交遊の多くが經驗する所であつた。

(三) 西川支配人を偲ぶ 岡 清 一

私は大正七年の二月に入店し、七月に庶務係から支配人室詰となりまして以來、机邊に勤務して日夕御鞭撻を受けて居たものですから二年足らずの短い年月ではありましたが、同室に在りし關係上、森様と共に御平常の事ども能く存じて居ります、其れだけに今度の御不幸に遭つては感慨無量で、眞實懿親を亡つたより以上に痛ましく感ずるのであります。

御在世中の事ども瞑想しますと、次から次へと腦裡に浮んで來ます。

○精勤なりしこと　私の知つて居ります範圍で、日曜日に全休せられたことは皆無と言つてよろしい、たゞ退店が平常の日より數時間早いだけであり、さうして平常は、毎日朝の八時過から夕の七時過迄終日店に居られました、が、店に居られると云つても、一日中に二三度金子様の部屋へ要談の爲行かれる外は、支配人室に在つて、内外の通信に來客の應接に寸閑が無かつたのです、誠に能くもあれだ

け氣力が續くものかと感心せずには居られませぬでした。

○頭腦明晰なりしこと　書類の通覽が實に早い、さうか云つて亂讀で無く一度目を通されたものは再び手にされない、チヤンと其腦裡に入つて仕舞ふやうです、それゆゑ内外の通信商談等も、既往の事が立ろに浮んで來て裁斷處理が速く又一度人を引見せられますれば、十中八九迄は其人と名とは判つて居て、其後二度會はれたものなら、モウ名簿に登録されたと同様に確かで、頗る記憶の良い人でした。

又郷里の商業學校在學中から、珠算の名人であつたと同窓の方に聞きました。鈴木商店で會計記帳方の仕事を行つて居られた時代にも、名人と云はるゝだけあつて計算の間違や帳尻の不突合等は全く無く、同氏が取扱はれた計算書は檢算の要が無いと云はれて居たさうです、尙ほ夫人に聞きますと、私邸に於ける月末の支拂は、大概夫人の手でなさることになつて居りますが、口數もかなり多いので、時々計算等手傳はれましたさうです、そして其計算は大抵暗算で行られ、メがいつもキチンと合うので「お父さんの暗算にはトテモ追附かぬ」とお子様達が申されたさう

です。

○能文達筆なりしこと　内地、海外の支店出張所から来る通信は大したものですが、一々應酬して居られました、其手簡と云つたら天下一品で、簡単な用件で短いものもあります、中には随分長文のものもありました、然し如何程長い書翰でも、文中同じことを繰返したり、要領を得ないと云ふ様な箇所は更に無く、面白い例を引いたり寸鐵人を殺すと云ふ様な箇所もあつて、全體が通俗平易で、實に讀み心地のよい雅味あるものでありました、それに頗る達筆で、書かれることの早いこと云つたら、常人のマネの出来ない程で、草稿を用ひらるゝこと更に無く、思ふに任せて筆なりペンなり走らせて居られたのです、便箋は瞬く間に書悉される、あの上部の一端が糊付けされて居る便箋の、一枚一枚を逐次取放される音………斷續的に聞かれた、高く早い其音は、未だに耳底に残つて居ます、同室の見習員が此便箋の音を聞くに、直に席を起つてコツピー帳を取出したものです、最初の中は御自分で大概照覆して居られたやうですが、こゝ數年前から非常に多忙になりましたので、私に原稿を與へられたり、口述されたりして諸方面へ出狀せられました。

絶えず來客があつて、便箋一枚書き初められると妨げられ、再び筆を執られること
又來客があること云ふ譯ですから、時には一ヶ所へ差出される手紙を其日に書了る
ここが出来ず翌日になり三日目になつても完了しないこと云ふやうなことも屢々
あるのを見受けましたが、前段を讀回されると云ふことはなく、直に次から次へと
書續けられたので、とても尋常人の企て及ぶ所ではなからうと、私はいつても驚歎
して居ました。

○温情深かゝりしこと 至つて口數の少い方ですから、一見すると畏るべく
親しむべからざる人の様に思はれますが、忠實に働く者に對しては、何時も譽め言
葉をかけられ、時には自ら物品等贈られました、殊に不幸なる境遇に在る者にはい
たく同情せられたので、氏の厚情によつて幸福に其日を送つて居らるゝ方々は、公
私共幾人あるか分りませぬ。

店童中勤務の成績佳良であり、且頭腦も良く、將來囑望すべき者は、店費を以て上
級の學校に入學させるやうの途を講ぜられたのも、氏の御發案で、現在此恩恵に浴
せる諸子も少くありませぬ。

私邸に在つても、召使の者に至る迄心を寄せられ、忠實に長く務めた女中などは相當の年輩になつて一家を構へるときは、其れ相應に耻かしからぬやうにして遣られたさうです。此れは夫人の御心添も多々あること、思ふのですが、一に主人公の指金に出たこと、信じます。最近には、九年一月寒さの殊に厳しかつた十三日の事、須磨の芳川氏嚴父(笛邨先生)が仙遊されたとき、芳川先生は茶會書畫などの道樂で永年親交がある、此凶報を耳にしては「さて、遽然取るものも取りあへず弔問せられました。が、密葬の十四日は私に代つて會葬するやう申されましたので、當日私が「只今から行つて参ります」と申しましたとき、今日は随分寒いやうだから此れを着て行き給へ」とて、御自身の外套と頸巻を出して下さいました。イヤ私も持つて居りますから」と云ふと、僕のは倫敦から送つて貰つたので非常に温いマア着て行き給へ」と親切に御勧め下さいました。再三言つて下さるので遠慮なく借用したところで、途中電車内で、實に親切な御仁であること夫是思ひ出し、感謝の念が胸一杯になつたのであります。

○時間を嚴守されしこと

總て几帳面で約束等は嚴守され、時間の如き最も

勵行されました。時々店用で宴會等に行かれましたが、約した時間には必ず出掛けられました。若し其時間に對手が来て居ないときは、直に人を呼んで聞かれ、又對手の方が約束の時間に來なければ、「ナニをして居るのか」と獨り言されることもありました。其れ故、部屋の時計を正確にして置くこと云ふことに充分注意して居りました。

○經濟を重んぜられしこと　店にて日常使用する文具品は、數量價額とも大したもので、便箋でも良いのは一枚數錢に當るものですから、此れは勿體ない、モ一少し悪いので結構だ」と云はれたこともあります。鉛筆の如きも、短くなれば鉛筆鋏に挟んで用ひられた位です。又來翰の西洋封筒は必ず保存して置いて、簡単な用事には之を割いてメモの代りに使はれました。外部へ出される手簡でも、社内の人等には、便箋一枚にモ一一行か半行で書終ることの出来る場合は、別の用紙に移らず其欄外に認めらるゝこと云ふ風でありました。

○公私の別を明かにせられしこと　ともすれば混同し易いものですが、私が見た所で、氏ほど劃然と區別された人は少いと思ひます。當然店用と思ふものでも

私邸から持参されたものを用ひて居られました。

○書畫の鑑識眼高かりしこと　店では新聞一枚も緩々讀まれることの出来ない多忙な處へ、他方面から書畫掛幅の鑑定を乞ふ人が多數ありました、店務の際に一瞥されて即座に、對手構はず眞偽を話して居られました、其れが頗る淡白でした、若し偽物であるご鑑定されたときには、一々其點を指摘して懇ろに説明して居られました。

書畫の鑑識は堂に入つたもので、其れご云ふのも唯一の道樂として、青年時代から苦心研究された結果だらうと思はれます。

○竹を愛されしこと　氏の性格を一口に云へば、丁度竹の様に眞直で、俗に云ふ竹を割つたやうな性格の持主でありました、日頃故人が竹を愛されて庭園に多數の小竹を植えられ「綠竹清々居」と稱へられたり、自ら號して「脩竹」といはれたのも決して偶然ではありませぬ、此外氏は梧桐、棕栢、八ツ手等もお好きだつた様で、邸内は是等の植木で満たされてあります。

○愛煙家なりしこと　一日中煙草を手にされない時は、執筆中の外殆ど無か

つたほど愛用されたものです。其煙草は主に葉巻で、中間に兩切、口附などを用ひられました。斯様に御自身がお好きですから、要談の長い來客には机の中から箱入の葉巻を出して勧められるのを屢々お見受けしました。

○家庭に於ける西川氏　夫人のお話にも、主人は毎朝五時には床を離れ、祠と佛前に詣で禮拜されてから朝食を取り、朝の新聞を一通り覽て店へ出勤されるのが常で、夕は七時過に歸られると早速お湯に入られて後食事をし、それから其日到着した來信と夕刊新聞に目を通され、又書籍等も讀まれて、時計が十一時を打つとサツサと寢室へ行かれました。こあつた位で、實に規律正しい生活を續けられて居たやうです。尙夕マの休祭日で在宅の時などでも、平常晝の間に横臥して書見されるるか、横臥の儘談話される杯いふことは一度も無かつたさうであります。

亡くなられて以來滿七ヶ月間、私は同家に居りましたが、其間に、お子様達一人として晝間無作法に横臥されたりしたのを、只の一度も見受けなかつたのは偶然でないと思ひます。又如何程寒い冬の朝でも、お子様達は人に呼起されて起床されたことが殆どありませぬ、さうかと云つて起床が遅いのではなく、御父上と同じやう

に實に早いのです、毎朝五時半乃至六時には家内中起床されますので、到底他家では見られない誠に正しい嚴格な御家庭であります。

御宅の御座敷には、博文公のものされた「和不失禮」といふ額が西面して掲げてあり、又二階の御座敷には、李軒先生の「動中靜觀」と書かれた額が東面して掲げてあります、故人の謹嚴和怡なる性情が遺憾なく表現されて居ると同時に御家庭の内状も窺はれて如何にも適はしく麗はしきことゝ思ふのであります。

○御罹病の次第　平素は至つて壯健な方で、病氣の爲に缺勤されたことは殆

どありません、處が七年の八月十二日、不幸にして鈴木商店が災厄に遭つた當時、店將來の事などで店主及重役の方々と共に日夜心痛され、數週間は食事も碌々喫べられなかつたこの事で、著しく健康を害されたのは其れ以來のことであると聞いて居ます、胃腸を害されたのも此頃で、其後賣藥手療治等續けられて居たやうです、九年の初め以來血色頗る悪く見受けられたので、數多の人からも養生法や受診の事など勧めて居られました、著しく血色が悪くなつたとお見受けしたのは二月頃であります、ドウモ腹工合がよくない、店の食堂に行く途、中炊事場の香が鼻に

入つてムツとして食べられないなど言はれて、態々お宅から午のお辨當を取寄せられるとか、パンを用ひられるとか、又は外出して食事を濟まされるとか色々やつて居られました、三月の初め私に向はれ「僕の顔色が悪いか」〔多分大勢の人からさう話されたからでせうと御尋ねになりましたから、私は「へい悪いです、實は一度申上げやうと思つて居たのですが、何分お忙しく緩々お話申上げる機會が無かつたものですから………かねがね森様からも近頃西川様の顔色がよくないチトどうかせられぬとイケない」など申して居られたのであります………少し日光浴と運動をなさつては如何です、晝食後三十分位運動に出られましたは………と申上げた時、何處へ行くか市中を歩くかと申されましたから、市中を歩くも悪くはありませんが店からですと大倉山邊へ行くのが一番よろしいやうに思ひます、途中嶮岨でなく眺望もよろしいから………都合でお伴さして戴きます」と申しました處、さうだなあ大倉山位がよいかも知れぬ………と言はれたのでした、何分來客が引も切らず押しかけて來られるので其餘裕がなく、終に一度も出掛けられる運びに至らなかつたのです、其後數日經過して御友人小松楠彌氏が易簣されたので、三月二十日

午後三時過から電車で熊内の同氏邸へ悔みに行かれ、數時間の後店へ歸つて來られて森様に向はれ「今日はどうした事か、店を出ると脚がフラついて太陽がマバユク、眩暈がしさうでした、ヤツトのここ小松家へ行きました、ドウもよくありません、尤も此間(十七日の)朝家の子供と山登りをやつた處が、夕マに登つたものだから少々疲れました、其爲か脚が少し腫れまして……」と話して居られました、お大事になさいませと申して、其夕方は平常の如くお歸りになつたのでした。

其翌日(三月二十一日、日曜)主治醫に見て貰はれたさうで、爾來醫師の注意により斷然休臥せらるゝことゝなりました、御病名は胃潰瘍と承つて此れは大變と思ひましたが、主治醫の話では「胃潰瘍とは申しながら至極軽い方だから大した心配はない、暫く安靜にして食物に注意さへすればよい」とのことであると、御家族の方から聞きまして稍々安堵したので、然しお宅では、主治醫の言はるゝ儘に出來得る限りの注意を拂はれて居ましたので、御経過も順調に、逐日御輕快のやう、お見受しました、御本人は勿論、御家族初め店の方々も皆喜ばれ、孰れも御回春の一日も早からんことを祈つて居たのであります。

御病臥の日數は五十餘日、私は毎夕お伺して其日々々の御容態を承り、且店用に付て何かとお差圖を受けて居りました、此間の御消息は、四月七日と同二十四日の二度、店で發行する濟美會報に戴せられた各方面からの病氣見舞に對する挨拶の辭（五）に大體悉されて居りますが、夫人が夜を日に繼いで御看護に力められました、多大の御心勞は、想像に餘りある譯であります。

其 一

小生儀一昨年夏以來少々健康を害ね食慾進まず平素運動不足より來れる胃病と思ひ賣藥の手療治致居候處昨年夏季に相成り病勢一進體量も減じ何となく氣力も衰へ醫師より初めて胃擴張と診斷され夫々服藥致居候得共餘り效驗無之のみならず更に貧血の度加はり最近に至り漸く胃潰瘍と判明仕り三月二十三日より醫師の嚴命に因り自宅に於て絶對靜養専ら流動物のみ攝取致居候次第、此事御聞及に相成候各位より御親切なる御見舞に預り御厚情難有感謝の至りに御座候何分饑餓療法の結果筆執る元氣も無之故一々御禮狀も差出不申缺

禮の段何卒御許被下度候幸ひ患部の出血も止み一兩日來薄き粥を喫ひ始め多
少人心地致候間其内漸次快方に向ひ候事と慰め居候に付左様御承知被成下度
乍略儀茲に右御禮旁々本日迄の經過申上置度如斯に御座候 拜具

大正九年四月六日

西 川 文 藏

其 二

謹啓本月六日乍略儀本紙を以て御禮旁々病狀御知らせ申上置候處各地諸君よ
り續々御見舞被下御厚情萬謝の至に御座候其後の經過誠に順調氣力も餘程回
復致候様覺え候得共今尙醫師は毎食粥一碗魚肉一片以上を許さず已むなく日
々卵黃五六個牛乳三合肉汁半合を薬餌同様勉めて嚥下致居候病臥以來一ヶ月
流動物攝取も相當苦痛に有之候間體力増進の爲め早く粥二碗三碗と進み願は
くは米飯の承認もがなご時々醫師に迫り居候得共此病氣の手當として可相成
胃を空にする時間の長さが主眼なる由にて中々同意を得るに至らず大に困難
致居候

昨今財界多事店務多端の際缺勤月餘に亘り各位に御迷惑のみ相掛居候事不本意の至りに候得共饑餓療法の利き目は著敷四肢瘦せ歩行さへ不十分に付残念ながら當分醫師の差圖に盲従する外なしと諦居候尤も如此餓鬼道修養も無期限には有之間敷來月にも相成候はゞ室内運動位は許され食糧供給も幾分緩和され可申さすれば自然元氣も復舊出勤の期も近かるべしと存居候

病臥當時より海外電報の往復コツピーは毎日店より取寄せ通覽致居候外書冊亂讀と喫煙と日光浴を日課とし傍ら床間の掛幅と瓶花に心神を慰め漸く貴重なる日子を空費致居候次第乍憚御安心被下度茲に失禮ながら重ねて御禮を兼ね近況御報知申上度如此に御座候 拜具

大正九年四月二十三日

西 川 文 藏

○御最期の模様 五月十四日の夕方常の如くお宅へ伺つた時、御伯母様がお出てになり「今日お午前から急に痛み出したので、早速松永先生（主治醫）と西先生（縣立病院副院長）の御來診を願ひ、注射の結果少しは痛みが止まりましたが、何

分急に痛み出したものですから心配して居ります」と承りまして、一方ならず驚きました、直ぐ御病室へお見舞せんかとも思ひましたが、わざと差控え失禮したので、然しどうも心配で堪りませぬから、翌朝（十五日）早々お伺いしまして奥様にお目に懸り、昨夜からの御模様を承り、京都の中西博士（大學教授）を一度お迎へなされては如何ですかと申して居る處へ、御令弟文之助様がお越になつたので、西川様に御相談していただき、早速店に行つて森様に申上げ、お差圖の下に庶務の藤田氏に急遽中西博士を迎へに行つて貰つたのです。

一方森様は、愁然取るものも取りあへず車を驅つて西川家へ參られました。最早意識は不明瞭であつたさうです、主治醫から急變腹膜炎併發重態とお聞になつたので、早速店へ電話をかけられ、金子、柳田兩氏に來邸を促されました、柳田様は御在店で直ぐ駈附けられました。金子様は折悪しく外出中でありましたから少々遅れて參られました。處が御容態は刻々危険に陥り、中西博士も間に合はず、又松永西兩先生の盡された最後の手當も其甲斐なく、午前十一時十五分夫人にシカと抱かれたまゝ、眠るが如くに逝かれたこととあります、人生の高潮期たる四十七

歳を一期として、果敢なくも永眠せられたのは、意外の出来事として、痛恨措く所を知らなかつた次第であります。

○御永眠より御葬儀までのこと　私は當時の感想と共に其概況を日記に認めて置きました、茲に併録して謹んで哀悼の誠意を表します。

五月十五日　斷崖から深い々々谷底へ突き落されたやうな思ひがした、最後の瞬間に於ける心の感じを言ひ現すべき適當の言葉を知らない、弔電が次々に來る御親戚の方々や店關係の人々が次から次へと見える、昨日迄極度に重く沈澱した空氣が俄かに攪拌されて騒々しくなつて來た、私は茫乎とした鈍い頭に鞭つて御手傳をした、呪はしい十五日も暮れた、夜になれば邸内ばかりは陰鬱な氣が漲つて電燈の灯も暗い、たゞ御通夜の方々のみだ。

善福寺法僧に依つて院號を戴かれた「超發院釋寂靜居士」と申すが其れである。

五月十六日　御入棺が滞りなく終つた、生前殊に御嗜好であつた書畫の外、シガ―乃至書籍や、日頃店にて用ひられた筆、ペンの數本も御棺へ納められた、尙ほ樟腦も澤山入れられた、御棺には白羽二重の覆ひが掛けられ、其上には御遺影、兩側には

心ある人々から贈られた花環が御棺を埋むる迄に飾られて、陰暗な濕つた御座敷の空氣に弔花の匂がしつとりと漂ふ、靈柩は斯うして靜かな晩春の夜を、深き哀愁に沈まるゝ御近親の人々に依りて護られた。

五月十七日　續々弔客あり弔電來る、頗る混雜の中に御親戚の方、本店の人々など葬儀の準備萬端取運ばる、夜に入つては御通夜の人々て又讀經が始まる。

五月十八日　初めて鮮地へ御旅行になつたお家様が、凶音に接し給ひ御驚き一方ならず、京城御着早々若御主人と共に今朝御歸神、直に御來邸、西岡貞太郎氏夫人と共に、いとゞ御歎きあり、愁涙に咽び給ふこと久しかりしぞ理りなる。

五月十九日　けふは密葬の日である、明け暮れ住み馴れ給ひし御居間も今日を名残りに、靈柩は午後四時頃邸を出た、後から力なく歩みを運んで門前迄靈柩に隨はるゝ御遺子の愛らしい御姿を見ては、又涙なしに居られなかつた、直に靈柩は特別の自動車に安置、後方の自動車には遺族、近親の方々並に店の重立ちたる人々分乗、御送り申上げ、會下山火葬場に於て茶毘に附された。

五月二十日

けふは御骨上げの日である、早朝遺族、近親、知己の方々と共に、店か

らは楠瀬、土橋、大崎、岡の四人自動車にて参場した、やがて御遺族一人に依りて護持された御骨は、歸邸の上、床の間に安置された、善福寺僧侶の讀經あり、且一七日の供養も滞りなく濟んだ。

嗚呼夢か、夢の様で夢ではない現實であるのが悲しい、あの高雅清秀の御風姿は未だ我眼前に髣髴して居り、あの御呼聲はまだ我耳底に残つて居るのに………

五月二十一日 二十二日 此の兩日は雑事と本葬の準備に忙しかつた。

五月二十三日 此日は本葬、鈴木商店店葬の日である、式場は市内下山手通八丁目の善福寺で、係の人々は數日來忙しく諸事萬端取運ばれたので準備全く成つた、式場の周圍は黑白の幕で張り廻され、場内は一帯に淨砂にて清められ、且數ヶ所に天幕張りの會葬者控所が設けられた、堂上佛壇の周圍は諸方より贈られた大小種々の花環其他(三百有餘)にて飾られ、供花の香は彌高く堂内に漂つた。

午後零時半、位牌を護持された喪主一藏氏の外、御遺族及近親者一同が自動車にて式場に臨まれ、午後正一時より式は最も壯嚴に執行せられた、葬主鈴木岩治郎氏を初め職員總代森衆郎氏、濟美會長鈴木岩藏氏、友人總代金子直吉氏の外數十名の

弔辭朗讀あり、何れも悲痛淋漓聲淚共に下るの慨があつた、次で各方面よりの弔電數百通は酒井丑松氏に依りて讀上げられた、斯くて京都東本願寺連枝今小路覺尊師を初め、江州今津西福寺其外十數ヶ寺の僧侶の讀經の裡に各自焼香を爲し、式を閉ぢられたのは午後三時であつたが、會葬者無慮三千名、頗る盛儀を極めた。

追記

一 御病氣も漸次御良好にて御全快も近きにあると信ぜられ、赤い水引のかゝつた内祝の品迄注文してチヤンと揃へてあつたこのこと、然るにこの赤い水引が黒い水引に變るとは、果敢ない極みである。

二 急變のあつた數日前自ら書齋に出掛けられ、書棚の整理迄せられたさうであるが、注文書の中、夏目漱石全集が最後のものであつたこのことで、其後着本毎に靈前に供へられて居る、悲しき思出の一つである。

(畵) か た み 北 尾 直 樹

脩竹西川氏逝いて後已に周年、木々の梢は再び緑にして人をして暗愁の新たなるを覺えしむ。

故人は廉潔の性、鍊達の才、温藉の情、凜然の氣、自ら人に長たるの風あり、商戰場裏劇務に歿頭せらるゝ傍ら、最も古書畫を愛し、特に唐宋の古書内外南宗畫の鑑賞に一隻眼を有せられ、予も時に其評説を傾聽して風塵を忘るることありしが、故人が忙中の樂事、今は思出の種となるぞ悲しき。

想起す、大正五年の初夏、予が結婚の際、故人は予に向つて「何にても君が望みのものを祝ひ參らすべし、何が宜しきや」と曰はれしかば、予は言下に「弊廬の壁間に橋本關雪の一畫幅こそ最も欲する所なれ」と答へしに、故人は即座に快諾せられ、「十年前に得たる畫會の一幅を進呈せん」とて、關雪筆秋景湖上晚歸の圖を割愛せられ、且關雪の畫は、何處かに天才的の熱あり、霸氣横溢筆力雄健なるが、自分は其れよりも、彼

のどこかに、一種の南畫趣味の雅潤なる處あるを面白しとす、唯達腕に過ぎて風韻は未だ一息の様に思はる」と云ふ意味の關雪觀を聽くを得たりき。

又憶ふ、大正七年初夏の日曜の一日、北村氏と共に、故人に隨ひて寶屋に晝飯をものせしことありき、此日故人は殊に上機嫌にて、公私の歡談に刻の移るを覺えざりしが、話頭何時しか古書畫の鑑賞談に入り、所謂世の成金が盲目的に書畫を買煽り鑑賞に眞の權威なきを慨して、現代の丹青界を白眼視し、「嘗て君に進ぜし關雪の一幅の如きも十年前に晝會にて價低く得しものなるが、今日は關雪の落款さへあれば、粗畫にても羽が生えて飛ぶ勢、關雪も亦今昔の感に堪へざるべし」とて、話は益々面白くなりしかば、予即ち興に乗じて曰く、「關雪の傑作を賜はりし上に望蜀の嫌ひあれども、今度は書幅を戴きたし、而も敢て御珍藏の容堂侯や春畝公をと申すにはあらず、嘗て承はれる後藤象二郎伯の二幅の中其一を割愛せられよ、伯は吾郷土の先進にして、幕末風雲暗澹の際、容堂侯と肝膽相照王事に盡し、二條城の大廣間、將軍及び大小侯伯星座の前に、大政奉還の爆彈的建議を爲せる快人物、維新の廟堂に翺翔しては、其器局の豁大を西郷從道侯と並稱せられ、死に臨んで朗々長恨歌を高吟

し、其半ばに至りて息絶えたる豪快さ、平生景慕に堪へざる所、殊に其揮毫の妙は元勳中の白眉なりと評せらる。願はくば其一幅を得て親しく雄大の氣魄に接し、修養に資するを得ば、貴下の恩惠も亦大なり」とて切に懇望せしに、故人は、「君は少々慾が深過ぎる、彼の幅は西村君に割譲すべく思へり」と一蹴され、且藤伯は氣宇卓犖活動已まざりし多情多恨の英雄として、自分も平生深く欽仰する所なるが、二幅の一は北地開拓の詩、他の一は高島炭坑時代の作なり、何れも一見さるれば恐らく垂涎三尺ならん」と揶揄されしかば、予は是非とも渴望を充たしたしと辭を盡して嘆願に及びたるに、故人は最後に呵々一笑せられ、然らば西村君には石鴻元の朱竹を割譲し、君には藤伯の一幅を頒つべし」と曰はれしかば、予の喜び喩ふるに物なく、歸路直に故人に尾して其邸に過ぎり、左の詩幅を賜はるの幸を得たり。

瓊浦第一梅 今夜爲君開

欲識花真意 玄海踏波來

爲郵船東海號事務長武市先生 鷹嶋 太守

七
起
顛

伯得意の草書にして、墨痕淋漓、龍蟠虎踞、偉人の面目躍如たるものあり、爾來愛藏して今日に及べり、然るに其後此一幅は奇しき因縁となり、昨年予の店名を帯びて上海に航するや、途次玄海の波を蹈み、身は後藤伯詩中の人となりつゝ、瓊浦に碇泊せり、時正に陽春三月、南國春更けて梅花地に委し、感慨自ら無量なるものあり、乃ち特に一書を裁して病床の故人に寄せしことありき。

故人は敏行の人なりしが、稍訥言なりき、而も訥言の雄辯とも謂ふべく、妙に聽者を引付くるの力ありき、若し夫れ其書翰に至つては、遒勁なる筆致と相俟つて、其豊富なる詞藻は、短篇に長章に概ね一氣呵成、天真流露し、或は輕妙暢達、或は莊重典雅、眞に書翰文の上乗にして、其明敏なる頭腦と瀟洒たる風格との躍動する所、予故人に於て其文は其人なるを觀る、今日予の篋中には、故人の遺影よりも一層其面影を偲ばしむる數通の雅翰を存せり。

先日オリエンタルホテルの一室にて御話ありし、先年小生が進呈せし關雪の山水と後藤伯の書幅と交換の件は、其時にも御話致候通、此幅馬鹿に長く到底普通の床に掲らず、又貴兄へは曩に一幅割愛せる故、二幅は無益に有之候と同時に小

生も藤伯の書幅は一點丈け珍藏致度候まゝ先づ此件は御免を蒙り申度然るに小生の所藏に係る秋月種樹の書幅中頗る出來榮のよろしきものあり殊に俗臭のなき處確に貴兄をして垂涎せしむるものあるべしと存候此幅と交換しては如何關雪は近來餘程成金と相成俗臭紛々たる男と相成候此男の作品は床間を飾るに足らずと存候得共貴兄より御話ありしを思出し一寸御相談申上候

二十九日

西川

北尾君

右の書翰は予が嘗て故人より賜はりし關雪筆秋景湖上晚歸の圖と後藤伯の殘りの一幅と交換を請ひし時に、一矢を酬いられし雅翰にして、書外含蓄の妙、一讀して煙波無限の感あり、回顧すれば、故人が關雪の書幅を割愛せられしより五星霜、關雪は新味ある南宗畫の開拓者、藝術界の覇者として名聲益々揚れり、偶々大正八年七月某日、某社の招宴に應じてオリエンタルホテルに至り、故人及び楠瀬君等と休憩室にて閑談中、書畫談の出でし機會に、予は故人に向ひ、關雪の幅は其後店主より

一幅を得たる故之を返璧し、其代りに後藤伯の他の一幅を與へられたし、嘗て賜はりし一幅と共に、双幅として伯の感化を滿喫したし」と懇談せしに、返還とは殊勝なれども交換は御免なり」とて其儘になり居りしに、越えて六日目に接受せるは即ち右の書翰なり、予面白しと直に一書を裁し、玉章拜讀慾深く候得共藤伯書今一幅渴望の念止み難し、折角の御高示拜命の筈なれども秋月翁の書には自分として藤伯程の感激なければ之と交換は拜辭す、それに御文中關雪近來成金俗臭紛々とは聊か恐縮に候、敵本の含蓄味輕妙なれど少々物騒に思はれ候、豪快當年政界の藤伯の風ある關雪の幅御割愛の儘愛藏可仕候」と答へ置きしに、新年正月再び左の芳章到來せり。

例の關雪秋景山水近々適當なる代りの掛物を御目に掛け是非交換願度者に御座候

先日神港クラブの新畫展觀に出掛けたるに關雪近時のナグリ書が滅法の高値に賣行肝心の十年前神戸で畫會を催したる當時の作品はサマデ高値に買人なき様子を見て誠に妙な時代と呆入候次第小生も一幅位十年前の作品愛藏致度

候得共願ご意に叶ひたるもの無之貴兄に進上せしものは十五圓の畫會で手に入りたる紀念物故先づこれで辛抱するの外なかるべしと存候貴兄は外に一幅御愛藏の由故今度は餘りインゴウな事を言はずに御交換下さるやう御覺悟願上候呵々

本家より徵發されたる方が若小生より贈呈せしものに比して優良なれば其の方にててもよろしく候少々慾張り居候得共代りの軸物が上等なれば敢て貴下に御不滿なき筈と存候

十 八 日

西 川

北 尾 君

此第二の矢には、予も思はずビクとしたれば、手紙の應戰では逆も叶はず、支配人室に飛んで行き口頭の白兵戰を試み、隙もあらば後藤伯書幅と交換の奇勳を博せんかと思立ちしも、口舌の應酬は其れとなく差止められ居るを如何せん、因て尙故人の芳書を再三熟讀せるに、短刀直入にして筆力強く人を壓倒し、而も言外に餘韻

の嬗々たるものあり、何ごなく故人の性格の閃きに魅せられ、殊に當年關雪作品の一幅位愛藏したしと端的に出でられたるからには、此上頑張るは心なきわざなりと、素直に關雪返還の覺悟を爲しつゝも、尙ほ藤伯の書幅に對し憧憬の情禁ずる能はず、智囊を絞りて認めたる返書は「貴諭即時實行可仕候、但し更に藤伯の一幅を得て双幅とし郷土偉人景仰の念を一層深からしめ申度、私に取りて關雪の幅にまさるものは此れ以外になかるべく候、然し最早これと交換とは申すまじく御返還申上候、昨年の方章に關雪を成金畫家の俗臭紛々たる男と痛罵された其半面の含蓄は別とし、少々藥が利きすぎて、私をして却て關雪畫幅愛藏の念を深からしめたるに、今度は鮮かに御頓變、新畫御展觀より關雪に對する今昔觀に十年前の傑作の一つ位は是非愛藏致度との仰せ、さもあるべしと存じ欣快至極、紀念物が其主に還ると云ふことは關雪も其の畫も共に満足すべく存候、茲に永らく鑑賞を縦にするを得たる借用料の意味にて晴川院の三幅呈上これは破損磨滅に瀕し私には保存に堪へず惜しきものに有之、何卒早速澁く御表裝下され度候、猶此の機會に於て返還の紀念として此畫拜見の爲時々御邸へ勝手出入を許され度御願申上候」此手紙と

共に關雪の書幅を故人の許に送りしに、故人は之に對し左の如く酬いられたり。
拜啓一昨日は態々人を以て早速關雪山水一軸御送り被下正に入手何か交換物
として適當のもの物色中なれども中々エライ見幕故ウカと切り出せず餘程愼
重審議最中に御座候藤伯の長條書幅は小生愛藏門外不出のものとして殊に又
貴兄は小品の方御所有に付無理に双幅双幅にならず一は長條一は小品ノミの夫婦の如しとする必要も有之
間敷矢張他の人のものがよろしきやう愚考罷在候、書幅か畫幅か一應御思召承
り度、畫幅なれば帆足杏雨山水紙本長條幅あり山本春舉の瀑布山水もあり田中
柏陰の山水もあり一應其内御來駕を仰ぎ御檢閲を願度所存に御座候兎に角關
雪に優ることも劣らざる妙品を差上申度何卒小生を御信用願上置候關雪借用料
の意味に於て晴川院の三幅御贈與下さるこの事なれどもこれは全然小生の畠
違ひにて折角の御厚意なれど一と先づ御返璧申上置候外の二點も拜見致候昨
夜大阪より玄人參り見せ候處小生は頓と此種のもの分り不申候爲に生憎兩點
共表装する迄の價値はなかるべしと申居候可翁とは誰か深く存不申候得共筆
力鈍しと申居候美人幅は拵へものと申居候、晴川院の三幅はウツカリ頂戴せば

跡がおそろしく桑原々々に候 頓首

二月二十三日

西川生拜具

北尾直樹君

予の作戦も故人の輕妙なる筆端に翻弄せられて、再び挑戦の餘勇もなく、只成行を觀望しつゝありしに、三月に入りてより故人の健康の勝れざること外見にも現れ、同室の森氏を始め周圍の人々より切に其御靜養を勧めしも、故人は一日も店務を廢せず劇職に執掌せらるゝこと平日の如くなりしが、月の二十日病を推して親友小松氏の喪を吊せられし其日より遂に臥床の人となられぬ、絶對の安靜と驚くべき養生振と、而して令室の懇到なる看護とにより徐々輕快に向はれつゝありて四月の中頃予上海より歸りし時には、故人は病間宿約を履み、關雪の代りに二幅の逸品を贈られ、添ふるに左の書翰を以てせられたり。

拜啓上海より御歸神の由一入御苦勞御察申上居候其内拜光成行拜承出來可申と存候先日來病中無聊なるまゝ曩の關雪山水代品いろいろ物色中の處兎に角

本日持參爲致候

杏雨風雨山水

煤嶺敗荷之圖

の二點見當中候幸い御間に合ひ候はゞ仕合せに御座候萬一御思召に不叶候はゞ後日適當のものご取替申候てもよろしく餘り捨置ては冥加の程恐しく當面の責塞ぎとして貳幅差出置候書餘拜光万々 草々頓首

四月十七日

西川文藏

北尾大兄坐下

予は故人の雅量と温情とが此の如き些事にも現るゝを思ひ感激措く能はず、其日故人を病床に訪ひ、店命は軽く之を復答し、蘇杭の山光水色を語りて之を慰め、遠からず回復せられたらんには、支那商業視察の途に上り、一日の閑を以て此勝景を探られんことを勧め、歡談圖らずも時餘に亘り、後にて予は其長坐を森支配人より戒められたることありき、爾來予等は故人全快の一日も速かならんことを祈り、且

其日の必ず近きに在るべきを期しつゝありしに、何ぞ圖らん、月を越えて十五日、病勢俄に革り、遂に予等を捨て、易簣せられんとは、吁、今や此書予に取りて故人の絶筆となり、此會予に於て最後の永別となりぬ、音容恍惚として猶ほ世に在るが如きも、長へに相見るに由なし、哀哉。

故人逝きしにより、折に觸れ事に臨み追念の切なるものあり、今茲二月某日、金子氏に隨ひ上京の車中、喫煙室にて氏の傍に眼光爛たる一偉丈夫あるを見しが、何時しか金子氏の快談に釣込まれ、連りに「おぢいさん」と親しげに呼びて話しかけ、天真爛漫諧謔百出の間、片言隻語時に人の肺腑に徹するものあり、人散じて後、此人同行の柳田氏(義一)及び予に向つて言ふ、彼の「おぢいさん」は予面識なしと雖も、蓋し天下の傑物ならん、凡そ傑物に遭逢せば、須らく他念なく服従して、彼の翠丸がラツキヨウになるまで握詰めざるべからず、此の如くなれば他の傑物の味も大概は飲込めるものなりと、一語雋永、予試みに其人の姓名を問へば、何ぞ知らん、是れ當年後藤伯と器局の豁大を並稱されし西郷從道侯の嗣子ならんとは、因て憶ふ、西川氏壯年二十、高商出身の新智識を以て鈴木商店に入り、金子氏及び柳田氏と形影相伴ひ、拮

据勵精二十有七年、遂に商店今日の大を成し、其柱石と爲りて、予等三千店員の師表と仰がるゝに至りしは、蓋し金子氏の翠丸をラツキヨウになるまで握詰めたるより得たる力と、故人本來の徳性と聰明とに由るものと謂ふべし、顧みれば、世間徒に目前の利害を是れ較し、得失相顧み、一時の方便に所謂人の翠丸を握り、朝夕に去就するの輕薄才子は其多きに堪へずと雖も、能く一個傑物の翠丸をラツキヨウになるまで握り、然も自己本來の特色を發揮し得る者果して幾人かある、故人は偉大の人物、又は所謂天才の人は謂ひ得べからざらんも、終始一貫獻身的に活動せる誠實格勤の人格美は、實に當世に得難き所にして、誰か仰いて典型とせざらん、思ふに故人が練達の才も、此貴き人格の根より培養せられたる美花なりと謂はざるべからず、而して其他に對する旺盛なる義務心、後進に對する温乎たる慈眼愛腸、毅然として狃るべからざる氣節、己を空しくして衆言を容るゝ雅量は、予等の忘れんとして永く忘るゝ能はざる所なり。

請ふ最後に、予が故人の逝後二ヶ月、上海航海途上の一夕、端なく故人を追憶せし感想記の一節を抄出せしめよ。

西川さん、私は店命を帯びて二たび上海に航すべく、今正に玄海灘上に在る、天氣晴朗長風颯爽として、船に弱き私も頗る清快を覺える、獨りて甲板を歩きながら徐ろに君を憶ふ、君の死の最後の光、それは丁度、今し夕陽が海の彼方に沒せんとし、眩耀するばかりの大なる光明を流しつゝある其崇嚴さにも似て居る、私等にさとりて君は實に此太陽の光であつた、平常は光明に親み過ぎてそんなにも感じなかつたが、其意外なる死によりて更に痛切に景仰の情が此胸の海中に湧出する、夕陽が沒して月はなく、夜の玄海は靜寂の深みに入り感慨無量、夜もすがら心ゆくばかりに追想したのである。

あゝ君の明敏の頭腦と、多年の精勵より得來れる鍊達と、殊に其後進に對する慈愛と、衆言を容るゝの宏量と、其高き人格紳士の典型と云ふ處に無上の價值がある、宜なり我等景仰の標的として感激已まざりしもの、人は理智に導かるゝも感激に生く、徳望の人に及ぼす力眞に大なりと謂ふべきかな。

君享年四十有七、前途洋々の身を以て溘焉衆望を空しくして逝く、豈玉樹風に折れ名花雨に摧くの恨なからんや、君病中予に贈るに風雨山水の圖及び敗荷の圖を以

てす、予此「かたみ」に對する時、轉た斷腸の感に禁へずと雖も、藤伯の書幅氣魄雄大、亦以て我心を勵ますに足る、願はくば予も亦君を學びて精勵恪勤、他年聊か奉仕を全うし、身自ら秋景湖上晚歸の人たるを得ば、庶幾は君が生前の知音に負かざらん乎。天地春は回れども人回らず、噫此長恨を如何せん。

④ 感 涙 餘 瀝 須 原 政 一

外には滿園の新緑か影暗き迄に繁つて居る、内には崋山の蜻蛉が床の間に飛んで居る、而も今や之を愛づる主は坐まさず、人生の悲痛事之に如くものがあらうか。

嗚呼氏は今、そも何處に在すのであらう、時には春秋あり、人事には榮枯盛衰免れ難く、咲けば散り、盈つれば虧くる世の習とは云ひながら、何たる天の無情であらう。此の如き人をかくも遽かに此世より奪はうとは、仰いで天に「哭」するも天應へず、俯して地に泣くも地聲なし、打寄する波は回れども、回すに由なき人を思ひめぐらせば、感慨胸に迫つて筆を執るに忍びない、されど今勸められて黙する能はず、涙を揮

つて此記を草する次第である。

月日の小車は旋り旋つて流るゝ水よりも早い、氏が此世を去られて早一年、嗚呼其れはもう去年の事だ、九十の春光夢の如くに、春は花無く淋しくなつたが、四圍の新緑滴るやうな皐月の半であつた、時ならぬ悲風一陣の爲に、哀れ翠の脩竹は突如倒れて復起つことが出来ないのであつた、嗚呼實に夢としか思ふことが出来ない、何で此れが事實として信じ得られやう、聲咳は猶ほ耳朵に響き、温容は猶ほ眼前に髣髴する、而も思へば幽明境を異にして永劫再び相見ることには出来ない、落涙滂沱諦めやうとして諦め得ず、忘れやうとして忘れ得ない、見るにつけ聞くにつけ、思出すのは唯在した時の事どもである。

氏は人と爲り温厚篤實、恬淡にして清廉であつた、常に意を其修養に用ひ、品性最も高潔にして古君子の風格があつた、萬人が齊しく其德風を仰望したのも之が爲である、平素親に事へて孝養至らざるなく、兄弟に對して友愛の情の濃かなことは人をして羨仰に堪へざらしめるものがあつた、人に接しては慇懃懇切、よく謙讓の德を守つて之を遇すること極めて厚かつた、而も己を持することは謹嚴で、薄く奉

じて顧みられなかつた、高德の士でなくてどうして能く之を爲し得やう。

其入つて鈴木商店に在るや、至誠以て事に當り、勵精刻苦百折不撓、夙夜孜々として終始渝らず、二十有七年猶ほ一日の感があつた、店務を統轄するに當つては、小心翼翼而も小事に拘泥することなく、其明晰なる頭腦と、機を見ること敏なる爛眼とを以て、能く大局を處斷し、巨細の機務裁決流るゝが如くであつた。

氏は又人を見るの明があつた、店員が新たに採用せられる場合には、必ず先づ氏の机前に立つて親しく會談の榮を得たものである、「明秋毫を察す」とか、此暫時の會談中に於て、氏は早くも對話者の人物を看破して誤ることがなかつた、而も一度其氏名、生國、容貌、特性等を知れば、深く腦裡に印して忘れることはなかつた、故に善く適材を適所に配し、人をして各々其處を得せしめたのである、氏は又燃ゆるやうな同情心の所有者であつた、泉の如き同情は、發して直に其部下の感涙と變じ、海の如き仁愛は、店員をして和氣霽々たる家庭的零圍氣の中に喜んで自己の職務に盡瘁せしめたのである、惟ふに社會は同情の交換を以て成立する、因果應報の理も茲に發するものゝやうに思はれる、而して人望とは天の授け給へる同情の反對給付に

外ならぬ、君が毀譽褒貶の外に超然として居られたに拘らず、其德望の隆々たるものがあつたのも、誠に此美しい心情の必然の結果と謂ふべきである。

利を見ては義を捨て、財を得ては親を忘るゝ風の滔々たる世に、恰も泥中の芙蓉のやうな、清廉純潔の士を有した鈴木商店の今日の大、其れは決して偶然でない、一枚の金貨もより多く懐中に入れやうと腕く人々、氏の眼には如何に映じたことであらう、百年の後には破滅すべき地上の權力を建設せんが爲に、幻影を逐うて狂奔する人々のみ多い世相、氏は之を如何に見られたことであらう、嗚呼欽仰すべき廉直正義の士よ、自ら希はずとも名は千載である。

觀じ來れば、氏の人格は玲瓏玉の如く、氏の徳は海嶽にも比すべし、併しながら「燕雀安んぞ鵠鴻を知らん」とか、鈍才の私が氏を語らうとするのは到底不可能の事である、殊に氏を月旦し、其の對外的生活を述べるが如きは、私に取つては潜越の業である、此は寧ろ之を大方先進諸氏に委し、たゞ私は茲に氏の對内的生活の一面、即ち家庭に於ける氏の平常を述べ、尙私が氏の庇護の下に在つて、今日に及んだ經歷の概略を記して、永遠に氏の恩愛を偲ばうとするものである。

氏の古君子然たる性格は、其家庭に於ても殆ど、所謂逸話なるもの、材料を作らるゝことがなかつた、早朝起出づれば、神佛に禮拜して後朝餉を濟ませ、新聞信書の通覽が終れば、間もなく出勤せられた、日暮れて帰宅せられると、直に入浴を終へ、和氣霽々裡に且語り且笑ひつゝ、夫人の丹誠に成る夕餉を取られたのである、慈父に接することが日に數時間に過ぎない子女達は、父懐しの情に堪へやらで、夕餉の終るを待ちかねて其膝下にうち集ひ、其日あつた事ども何くれと物語るのを、さも愉快げに莞やかな笑を漏らして聞きながら、夕刊や來信に目を通し、返信を要するものは必ず其日の中に認め、暇があれば各方面の雜誌書籍など繙かれるのが常であつた、日曜日と雖も必ず出勤して店務を處理し、午後三四時頃には帰宅せられたが、多くは庭園の手入や書畫の觀賞に其半日を過された。

氏が美術品、就中書畫骨董に深い趣味を有して、其鑑識に長けて居られたことは、茲に私が呶々するまでもない、全國斯道の人ならば、氏の名を知らぬ者は無かつた、この事である、げに氏の美術品に對する趣味觀念は、彼の美術を解せず美的觀念の低級なる成金者輩の其れと、到底日を同じうして語ることが出來ないものであつ